

## —資料4—

## カルチャーショック

## 人民幣と外貨兌換券

SUENAGA OSAMU  
末永 敏

1981年7月末から12月末まで、私は学振の特定国派遣研究者として中国に滞在し、中国科学院上海昆虫研究所をベースとして糸状虫症媒介蚊の研究に従事した。中国へ行った際、我々は通常、持参した円を中国の通貨「元、角」に交換してもらって使用する。中国銀行発行のこの通貨は兌換券とよばれ、再び円と交換することもできる。ところが私の場合、中国内での旅費、滞在費等は一切、中国人民銀行発行の人民幣で支給されたので、これを使う際にときどきトラブルが生じた。最初のトラブルはホテルの理髪店で支払いの際に生じた。人民幣を出したところ、「あなたは外国人なのに、なぜ人民幣を持っているのか」と疑われたのである。幸い、同じホテルに中国科学院外事局の担当者が泊っていたので、彼の取りなしで簡単に解決した。このようなトラブルは買物や食事の際にもときどき生じた。帰国前の12月下旬、私は長崎市の姉妹都市、福州市を訪ねた。その際、航空運賃を人民幣で支払うつもりでいたところ、事務職員がたいへん困った顔をして「航空会社が兌換券でないと受けとらない」というのである。結局、往路分は手持ちの兌換券で支払い、復路分は私のもっていた人民幣を国から福州市に割当てられていた兌換券と交換してもらい、航空会社へ支払うことで結着した。福州市の担当者には御迷惑をおかけした。私は翌年も中国に来て仕事を続けることにし、残っていた人民幣を銀行に預けて帰国した。

1982年に再び訪中した私は、週末を利用して蘇州を訪ねた。軟車の座席は6人掛になっており、中国人1人（私の付添人、唐氏）、タイ国在住の華僑2人、外国人3人（フランス人夫妻と私）が掛けていた。上海駅発車後間もなく、華僑の1人が「乗車券が高すぎる」と言い出した。全員が乗車券を出して比較した結果、3通りあることがわかった。最も高いのは外国人料金、次に高いのは華僑料金で約半額、最も安いのは中国人料金で華僑料金の更に約半額であった。華僑は「同じ中国人なのになぜ運賃に差をつけるのか」と不満をもらしたわけである。唐氏は中国の労働者賃金を含む国内事情について熱心に説明していたが、ついに納得されなかったようである。

(熱帯医学研究所助教授)

連載第4回



福州市人民政府に游徳馨市長を表敬訪問したときの筆者（左から2人目）

## マッキントッシュ氏のこと

YOSHIKOSHI KAZUMA  
吉越 一馬

マッキントッシュ氏はスターリング大学の gardener である。月に2回大学が所有するフラットへ庭の手入れにやって来る。一昨年3月から10ヶ月間、文部省在外研究員としてスコットランドのスターリングに滞在した私は、遠来の家族連れということで、大学のフラットに入れて貰った。この住いは家齡100年以上、4世帯用の大きな二階建石造りで、2世帯分は個人の所有であった。階下には。私達が愛称で“パキちゃん”と呼んでいたパキスタンから留学していたアクタール氏が住み、その隣に70過ぎのターナー夫妻が住んでいた。この二家族とはすぐに顔馴染みになったが、どういう訳か二階の隣人とは時折壁越しに聞こえる物音だけで、ついぞ挨拶を交す機会がなかった。

2週間毎にやって来るマッキントッシュ氏は、まずパキちゃんの庭の手入れをし、それから我家の芝生を刈る。夫々の庭には小さな花壇、20坪ほどの芝生、西洋シャクナゲの植込み、それに庭を境する生垣があった。私が芝刈り以外は暇々に手入れをしていたので、彼はパキちゃんの庭では大抵1時間半ぐらい作業して